

寄稿

「コロナのない夏～1970年への旅」

村田 貢（22期）



ここ15～6年、隠岐へ帰省するときはひとり旅することに決めている。京都の自宅に猫が二匹居て、夫婦で留守に出来ないからだ。

飛行機を利用すれば伊丹から隠岐まで一時間足らずで着くのだが、夏にそれではつまらない。せっかく田舎に向かうのだから道中の空気を吸い季節感を味わいたい。中国縦貫道から米子道を通る高速バスを利用する。高校生時代を過ごした場所に寄り道出来るのがいい。

京都から出発する出雲市行きの夜行バスに乗り松江駅で降りる。早朝の5時過ぎに着くがお盆の頃なのですっきり明るい。長旅で首や腰が痛いけど清々しい朝だ。

バスを降りると、近くのコンビニで飲み物とパンを買って駅の待ち合いまで行き、洗面を済ます。七類行きの乗り換えバス出発まで2時間以上あるが、やることは決まっている。駅の正面へ出て左に進む。朝日町や寺町といった街並みを越えてまっすぐ歩いていくと宍道湖畔の白潟公園にたどり着く。いっぺんに目の前の景色が広がる。大好きな場所だ。



宍道湖の朝はいつ来ても穏やかで美しい。嫁ヶ島と公園の松の枝振りとのマッチングが絶妙だ。この街で3年間過ごした身にとって、とても誇らしい眺めである。時間が合えばシジミ採りの小舟にも出会える。ずっと西の彼方には朝もやの中に霞む出雲平野がある。神々しい思いで見ると。右手にある「しんじ湖温泉」のホテル街の景色もいい。湖水に浮かんでいるような浮遊感がメルヘンチックな気分させる。



ベンチに座ってパンをかじっていると、ジョギングや犬の散歩をしている地元の人が「おはようございます！」と声を掛けてくれる。そんな時はいかにも遠方からの旅人然として「おはようございます！」と礼儀正しくお返りする。学生時代にここに残してきた何かを取り戻したようないい気分になる。



シジミ漁の小舟が浮かぶ早朝の景色を楽しみながら、50年前には無かった橋をゆっくりと渡って末次公園まで来る。高校生時代、水際に腰掛けて水郷祭の花火を眺めた場所だ。淡い思い出もある・・・。

今は湖岸一帯が遊歩道になっていてこれがまたいい。地元の人とすれ違いながら温泉街の端っこ辺りまで歩いて行き、振り返る。まるで平和の象徴のような眺めだ。



帰省する年によっては七類からのフェリーを午後の便にして、遊ぶ時間を作る。一畑電鉄のしんじ湖温泉駅（北松江といったほうが我々にはピンとくるが・・・）で一日乗車券を買って、出雲大社まで行ったり、古い電車を見に平田駅で下車したり、途中の無人駅でホームに降りたりして、湖面の向こう側にある景色をぼんやり眺めながらまた戻ってくる。

時間があるときはレンタサイクルを借りて城下町の探索だ。さすがに歴史の街、あちこちに古い橋や史跡の由緒書があって退屈しない。よく遊びに行った同級生の古家が見つかったりもする。

こうして下宿学生時代には気づかなかったことを新たに発見し、当時を思い出したりして、ますます松江という街が好きになるのである。続く・・・。